殘して來るとは豪い人ぢや、それでは鶴さん、雜穀八の家を起してやつとくれ、賴みます」

これから鶴さんは、養子になつて働くの働かんのやない、夜の目も寢んと働きます。朝は暗いうちから起きて市中を歩いて紙屑や繩屑を拾ひ、紙屑は屑の問屋へ賣る。繩は小かく切つて左官へ壁のスサに賣る。夜が明けると漬物を賣りに行く、歸ると昆布卷を賣りに行く、晝る前には「とうふ」、晝すぎになると「しがらき餅」夕方には「刺身」日が暮ると「うどんやイそばイヤウ」と夜泣うどんに出る。「河内瓢單山辻占やでござい」夜中になると町内の夜番に行く。一生懸命に働いて小金を殘したので。桝屋さんを賴みまして小さな米屋の店を開きました。商賣は中々旨いもので、勉强を致しますので宜う賣れます。桝屋へ預けました三百圓を無いものと思ふて、堂嶋の相場へ手を出しました。運が宜い三百圓張ると六百圓になりました。六百圓モウ一ツ張ると千二百圓になつた。何くそと張ると二千四百圓になつた。買ふとドドツと上る、上つたとこで賣ると下る、下つたとこでグツと買ふと上る。賣ると下る。買ふと上るで、暫くの間にウンと財産が出來ました。前の養子が賣つた地所を話をして買戻しました。借家に仕切つて住んでる人にも譯を云ふて、立退料を出して出て貰ひました。以前は藏が三戸前の處を、五戸前にして、八間間口を十間間口に立派な家を建てまして、小さう仕切りまして雜穀が店の者の商賣此方は自分の出生した商賣米屋、店には米搗臼三十挺も並べて米搗男が米を搗いて居ります。聲は一番調子は二番「松のナ名所は播州でござる」（ドスン、ドスン）上

かけて五十人からの家内で鶴さんは、大店の主と云ふ樣な顏もせず、若い者と同じ樣に着物は河内縞に厚司を着まして、雲齋の前掛、矢立と手鍵を腰に差しまして頭は手拭でバイ卷にして働いて居ります。

「横町の增田さんへ直ぐに五斗持つて行き」

「竹内だす、一石持つて來とくなはれ、お晝に焚くお米がおまへんね」

「ヘェ毎度有難さんで、直ぐに持たして遣ります。オイ竹内さんへ一石持つて行き」

「御免」

「ヘェー」

「二石直きに持つて來とくなはれ」

「何誰さんで」

「裏町の小林だす」

「宜敷うおます。毎度有難たうさんで」

また出入の商人が澤山に參ります。

「ヘェ、今日は毎度どうも」

「何誰」